母、智恵子の道程（みちのり）

平成十一年三月二十八日早川智恵子米寿祝いを記念して

阿部英子記

撮影：見香子 ブレッキン（英子の次女）

著者　阿部英子　2021年12月5日 81歳で急逝

母の米寿祝いに合わせてこの原稿を1999年に執筆した。持病を抱えた母は93歳で生涯を閉じたが、前日まで元気で広い斜面の庭の整備を済ませ、母の歳以上に元気で暮らすであろうと思われた姉の急死は、遺された兄弟・親族にとっては、受け止め難い衝撃であった。

2021年12月25日阿部英子を偲んで、その母 早川智恵子の米寿祝いの記念品として作成したこの「母、智恵子の道程」をここに公開する。
またもう一つの記念品として24番目の孫、早川仁志郎が作詞・作曲・演奏し、CDを 作成した「あなたに逢えた喜びを」も公開する。

母の道程

桜の花が開きはじめた、穏やかな春の陽射しの中、母にゆかりのある方々にかくも大勢お集まり頂き母の米寿のお祝いが出来ますことは、この上もない喜びでございます。

父と母が結婚し、子供が六人生まれ、六人の兄弟がそれぞれ結婚し、孫が二十四人、孫も次々と結婚し現在、曾孫が十二人で、母をルーツとするファミリーは六十人となりました。

まだまだ年頃の孫達が、これに続くことでしょうから、早川家の扇がどれほど大きく広がるか楽しみです。

この扇の要(かなめ)である母の道程(みちのり)をお話しさせていただきます。

東京小石川の出身

母智恵子は、長野県須坂出身の父房次郎と福井県藤沢出身の母よきが東京小石川で世帯を持ち男四人、女四人の八人兄弟の、上から二番目の次女として生を受けました。

小さいときから利発な子で小学校三年生の時には母親を助け、兄弟の面倒を見ながら家族の賄いを任されました。

天ぷらを揚げたりお刺身を切ったり、お料理上手な子供でした。

母の姉は子供が大好きだったので、いつも弟や妹を外へ連れて行き、一日中近所の子供達を交えて、子守をしていたそうです。

母が高等小学校を卒業する時、受け持ちの先生に「この子は勉強の出来る子なので上の学校へ行かせてあげてください」と随分説得されましたが、貧乏人の子沢山でそんな余裕もなく、ましてや女の子が学問など不要だと頭から反対されてしまいました。

今のように奨学金制度があるわけでは無し、まだまだ女性蔑視の世の中です。母は一人心の中に思いをしまい、母親のすすめでその頃では、まだまだはしりだった洋裁所へ、花嫁修業のつもりで姉と一緒に通うことになったのです。

本当は、母は女医さんになって病気の人を治してあげたかったのです。

父との出会い

そんな時、丁度、若干十九歳の父が独立し「ミシンを踏める女工さん求む」と新聞広告を出し、その新聞を読んだ母親が「すぐにフーちゃんとチーちゃん応募しなさい」と云われ、母の姉と母を父のもとに走らせました。

父も二人の姉妹を見ていっぺんに気に入り働いてもらうことになりました。父は利発な十五歳の妹娘に、すっかり心をうばわれ、可愛いくって可愛いくって仕方がなくなってしまったのです。

初めは王子の自宅から姉と通っていたのですが、父の仕事も軌道に乗り一軒家を借りることが出来たので、それを機会に姉妹は住み込みで働くことになりました。

結婚の申し込み

昭和二年三月十五日、父の二十歳の誕生日、働いてる人達が父のお祝いをしてくれました。皆が帰ったあと、後片づけをしていた母が一人だったの

で、父は思いきって自分の胸の内を話しました。「君は私が好きか、嫌いか正直に答えてくれ」と。

母はしばらく無言で、ぽつりと「好きです」と答えました。父は、ほっとして「それでは私と結婚してくれますね」と尋ねると「はい」と決意を示してくれたので、善は急げとあくる日、母の両親のいる王子に駆けつけ「智恵子さんを私の嫁にください」と頼みましたが、父親に立腹され追い払われてしまったのです。

その理由は「姉妹を預かっていながら妹をくれとは非常識極まりない。それに人も立てずに本人が直接くるなどとは何事だ。絶対に娘はやらん。もうあんたの所では、娘達を働かせない」と怒鳴られてしまいました。

次の日、父は箱崎町に住んでいた自分の両親に話に行きました。父親も「まだ歳が十五才の娘では若すぎる。それに自分が使っている使用人を嫁にしては世間体が悪すぎるのでだめだ。どうしても結婚するなら勘当だ！」と叱られてしまったのです。

勘当されて結婚、そして徴兵

すると父は、すぐさま勘当を受けることにして分家届けを下谷区長に提出して、戸主になり父の奉公先だったご主人の福田さんに頼み、正式に母の両親へ申し込みに行ってもらい、めでたく昭和二年四月吉日、緒婚式を挙げる運びとなりました。

その後、三ケ月は夢のような楽しい時が過ぎていきましたが、七月に入ると徴兵検査があり父は甲種合格で八月には入隊することとなりました。

父方の祖父と祖母

部隊は朝鮮の羅南と決まりました。せっかく軌道にのった商売と、結婚したばかりの新妻を残して、異国朝鮮に向かったのです。

長女出産とその死

その時、母のお腹には子供が宿っていました。その間、父と母は熱いラブコールの手紙のやりとりを続けました。

父は紙がもったいないのでルーペで見なければ見えないような細かい字でぎっしりと書いてきたのですが、母の手紙は巻紙を使って毛筆でサラサラとしたためた達筆なものでした。

入営するとき身籠っていた母は父の留守中、女児を出産し名前を恵美子と名付けました。

手紙で知らせを受けた父は日本に残した妻と愛児のところへ飛んで帰りたい思いが募りました。

⬆ 現役兵時代の父

東の空を眺めては涙に暮れる毎日だったのです。

その後、ますます日本は不況の波が押し寄せ病弱で生まれた乳飲み子を看病しながらミシン仕事に精を出している妻が父は不欄で仕方がありませんでした。

三月の末のある日、中隊長殿より呼び出しがあり、「早川上等兵には気の毒だが君の子供が亡くなったと奥さんから私宛に知らせがあった。『折をみて話してください』とのことだった。君の細君は若いがなかなかしっかりした立派な人だ。君も細君の気持ちを察して除隊までしっかりやってくれ」と告げられました。

父は妻を思い涙がとめどもなく流れ、自分のベットの隅でお経をあげて、まんじりともせず一夜を過ごしました。

兵役を受けてから一年半余り昭和四年六月、無事、母のもとへ父は帰ってくることができました。

除隊後の不況と苦労

父の除隊後、不況はますますつのり商売を再開したもののうまく行かず母にミシンの内職をさせながらハサミの研ぎ屋さんをやったりミシンの月賦販売員をやったり謄写機外交員で名古屋まで売りに歩きましたが、はかばかしくなく仕方なく東京に帰りました。

原点に戻って「ミシンで行こう」と母と二人で一生懸命ミシンを踏み出したところ泣きっ面に蜂で階下の家主から苦情が出てミシンが踏めなくなってしまったのです。

翌日から家捜しです.....漸く千住中組町に移転することができました。結婚

ミシンを踏む智恵子

割烹着の智恵子

以来、二人だけの生活が無かったので朝から寝るまで夫婦で一心にミシンを踏んでいられたこの時期が一番楽しい時でした。

しかしながら、この生活も食べることはできてもお金を残して事業をする資金を作ることは出来ません。

ボタンの露天商で元手を稼ぐ

小資本で出来る商売はないかと、あれこれ考えた末露天商を思いつき前から取り引きのあった板倉ボタン店に事情を話したところ半端のボタンを石油缶十五杯分も気持ち良く分けてもらうことが出来ました。

貸車屋で荷車を借り、夜十一時までかかって千住の家までもって帰り翌朝さっそく、くずダンボールを買ってきて母と二人で毎日毎日ミシン仕事そっちのけでボール紙に同じボタンを選り分けきれいに拭いて糸でとじる仕事に夢中になりました。

いっぽう、六尺×三尺の売り台を自分で作り上野松阪屋の前で露天の権利を持っている人が休んでいたので、その人から一時的に権利を借り受け店を開いてみるとおもしろいように売れました。

母は昼間はミシン仕事、夜はボタン綴じと二人で働きづめに働き続けました。

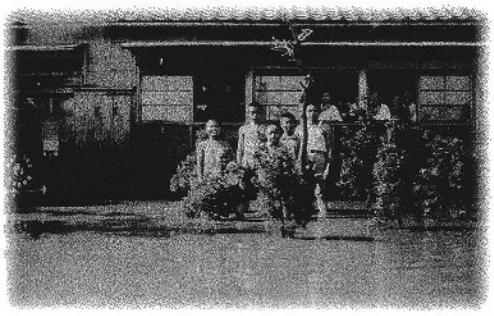
そのうち資本金も貯まり貸してくれた露天商の人も戻って来られたので露天商をやめ、父は母の姉と弟を引き取ってミシン裁縫を本職にして加工業に踏み切ったのです。

その頃母は子供のズボンを一日四十本も縫える腕前になっていました。

長男誕生と神田に出店

そして昭和七年十二月待望の男の子俊一が生まれました。永い苦難の時代をどうにか切り抜け長男という宝を授

千住の縫製工場と大水



かり家庭が急に明るくなったのです。

そして、かねてから神田にもう一度進出したいと願ってた父は、兄の勧めで店舗が見つかり、資本金三千円を兄さんに半分出資してもらい、新店舗を出すことが出来ました。

屋号は父の生まれ故郷が愛知県大字和泉であることと、店の近くに流れている神田川に掛けられている橋が和泉橋であること、町内には和泉小学校があるという、三拍子そろった名前を取って「和泉屋商店」と決めました。

松坂町の加工所と王子でミシン加工所も開き昭和八年十二月神田大和町に和泉屋が発足した次第です。

ビラ作戦で大盛況

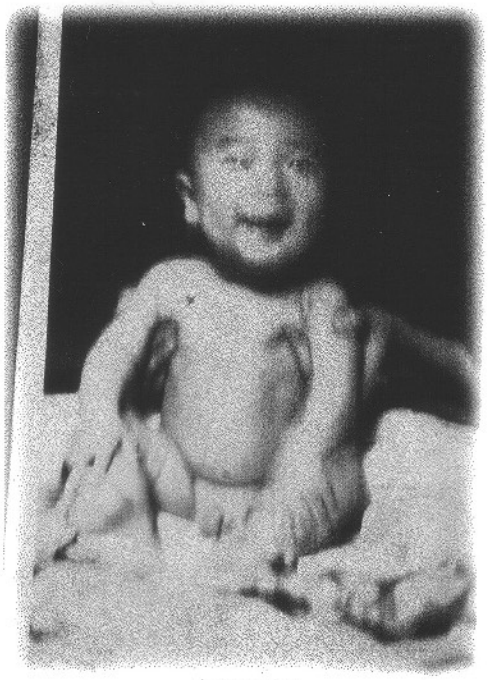
しかしながら、ふたを開けてみるとお客はまばら北口の店には一日五、六人しか来ない情けない日が続きました。

仕方なく外売に精を出すと少しずつお客様が増えてきました。ただそれでも思うようには、いかず途方に暮れた時、謄写機外交をやっていた頃の印刷機が残っていることを思いだし、さっそくそれを使って店の前に「原価販売」とたくさんのビラを張ったところ、一日百人ものお客が押すな押すなの盛況ぶりとなり、品切れ状態が続くという有り様になりました。

わずか一週間そこらで和泉屋商店は百八十度の大変化をきたしました。開店以来やることが無く困っていた者が寝る間もないほどの商売にぶつかってしまったのです。

こうしてトントン拍子に人気をつかみ優秀な職方さんを十五軒も獲得して毎

生地の検査をする父



次男和好

日千点余りの製品が仕上がってくる状態になりました。

その年の暮れ長兄に出して頂いた出資金千五百円をお返しし名実ともに父の店となりその暮れの純益が金三千円をあげたときは、母と手を取り合ってうれし涙を流しました。

その後、次兄和好が生まれ、姉の賀恵子が年子で生まれて、母は店と子育てで寝る間も無いほどの忙しさが続きました。

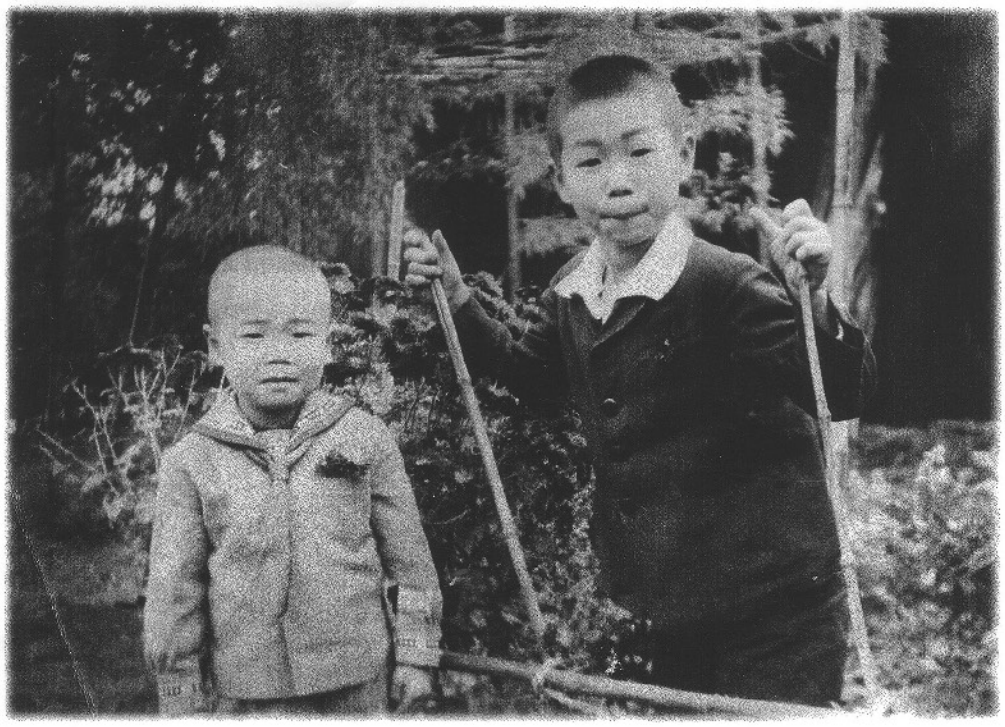
次男の大病

そんな折り二歳になったばがりの兄和好が、悪性の消化不良にかかり、医師からは匙をなげられ死を待つばかりとなりました。

その時「やれることはすべてやってどうか助けてやってください」とすがる母の目に、父は決心して一日一合の輸血を一週間続けたのです。

当時の輸血は大変な手術で子供と

次男和好と長男俊一



長女賀恵子と智恵子

父しか病室には入れず、母は我が子に会わせて貰えなかったのです。

父の腕から兄の足に輸血を一週間ぶっ通しで続けたところ、一週間目に博士から「この子は助かるよ」と言われた時、父の目からは涙がとめどもなくあふれてきました。

さすがに強健な父も体がふらふらになり、生卵とほうれん草を食べ続けた一週間でした。

病室の中に入れてもらえなかった母が生死をさまよった我が子を胸に抱けた時の感動はいかばかりだったことでしょう。

亡きわが子への思い

その後三男寛兄さんが生まれました。が、当時流行の百日咳にかかり生後百日たらずで短い命を終えてしまったのです。

入院先の病院から母に抱かれての帰宅でした。母はよく述懐していました。「夢をみてうなさるときは、いつも死んだ恵美子や寛の夢なのよね。でも不思議に母がなくなってからは母さんの夢に変わっていったのよ。どうしてだろうね」と娘の頃の私につぶやくように話してくれました。

母の胸の奥には、亡くした我が子への切ない思いの消えることが無かったのでしょう。

二年後、私が生まれその後、弟俊和が生まれて子沢山の母になりました。

鎌ヶ谷への疎開

昭和十九年、長兄俊一の父兄会に出席したおり、母は受け持ちの先生に呼び止められ「早川さんだけにお話しするのですがお宅はお子さんがたくさん

長女賀恵子と次女英子

いるので、早く安全な所に引っ越したほうがいいですよ。東京はまもなく火の海になるでしょうから。」と言われ、その言葉を信じて防衛召集で留守だった父を残して、以前買ってあった鎌ヶ谷の古い農家へ子供五人と共に、トラックで疎開してしまったのです。

私は茶箪笥の脇に姉と一緒に揺られて行きました。父が神田の家へ帰ってみると我が家はもぬけのから、びっくりして鎌ケ谷へ行ってみると、一生懸命に畑を耕している母がいました。

東京生まれで農業には無縁の母が地下足袋を履いて、肥桶をリヤカーにつんで働いてる姿に目頭が熱くなり、頭が下がる思いでした。

あるとき、読売新聞に母の写真入りで「国策に協力する模範疎開一家」と大見出しで載りました。

長女賀恵子と智恵子

村中の評判になったそうですが、村人は「早川さんにヤミで食糧を売ると新聞に載って仕舞うので具合が悪い」と食べ物を分けて貰えなくなってしまい困りました。

長女賀恵子と智恵子、三男俊和、次女英子

洋装の智恵子

父の再招集

やっと鎌ヶ谷村の生活にもなれ落ち着いてきた頃、都会は戦火が益々激しくなり「もう来ないだろう」と思っていた三十八歳の父に、再び赤紙が届いたのです。

ある日、組合から戻った父に母が「あなたに召集が参りました」と落ち著いて言うので「また防衛召集がきたのか」と軽い気持ちでいましたら、召集令状だったので大変な驚きでした。

「明朝十時までに世田谷の砲兵連隊に到着せよ」とのことで、親類に会う時間もなく、昭和二十年三月十三日、小学校六年生の兄俊一を自転車にのせ、母に作ってもらったドブロクを水筒に入れ、ゆで卵を十個ほどリュックに詰め込み、明けかけた鎌ヶ谷の道を駅まで急いだのです。

私もその時、目をさまし母が父の為に用意した卵の山がうらやましくて「おかあちゃん、私もほしいなあ」とねだったのですが、母は「これはお父さんがお国のために働いてくださるのに持って行ってもらうのよ。だから英子は、がまんしてね」と言われて、父がうらやましくて障子の陰から父と兄を見送るというよりも、四歳の私は卵の入ってる父のリュックを見送ったのです。

兄一人に鎌ヶ谷駅まで送られた父は息子がいとおしく「おかあさんと弟と妹たちを頼むぞ」といって汽車に乗り込みました。

兄は無言でいつまでも、いつまでも父に手をふり続けました。

昭和二十年八月、あの玉音放送の直後、下の弟廣行を身籠もっていた母は臨月の大きなお腹を抱えながら敗戦の日本の国がどうなってしまうのか真っ暗なとき、昔、新婚のとき朝鮮羅南に出兵したとき交わした、父と母の柳こおりいっぱい大切にとっておいた手紙を、庭の片隅で一枚一枚燃やしました。

そのときの母の心情を思うと同じ女性として母として、胸がじんじんと鳴ってきます。

幸いにも内地にいた父は八月十八日には鎌ヶ谷へ麻袋いっぱいのカンパンと毛布をもって帰ってきました。

そして九月、弟廣行がたいそうな難産で生まれました。

その後、父は東京入谷の統制組合に専務理事として通い、母は子供達の面倒を見ながら畑仕事に精を出しておりました。

強盗団との奮戦騒ぎ

ある夜、鎌ヶ谷の今の家を新築中、いきなり日本刀を持った五人組の強盗団が侵入しました。

母が電気を付けようとすると電球めがけて日本刀を投げつけたのです。

夏のこと幸いにも萱(かや)の中に破片は飛び散りました。母が手早く片付けると乳飲み子だった廣行が泣き出しました。この時とばかり母は弟を抱きかかえ廊下の隅にあるお手洗いへ入りました。

強盗の一人が刀を振りかざして付いてきましたが、母は寝間着の裾をパッとまくり白いお尻に驚いた若い強盗はあわてて戸を閉めました。

母はしばらくトイレに座り作戦をたて、おもむろに出てきてみると日本刀を突きつけられた父はどんどん後退りをして押し入れの戸のところまで追い込まれていました。

母は金庫の前に座り弟を抱きながら金庫を開けて中の手提げ金庫から家計費分のお金を渡しました。

すると「こんな、はした金じゃない。お前さんの家には、うなるほど金があると聞いた。それを出してもらおうじゃないか」と脅されました。

その小引き出しには新築中の家の支払い金十五万円が入っていましたので何としても開けられません。

母はとっさに「この引き出レには子供達の通信簿や書類が入っているのですが引っ越しのとき鍵を落としてしまって困っているんですよ。嘘だと思うのでしたらここに沢山の鍵の束があるので開けてごらんなさい。なんだったら刀でこじ開けてもいいですよ。どうせこれは金庫なんて代物じゃなくてただの鉄の塊ですよ」と母が唆呵(たんか)を切ったので強盗もすっかり母の言葉を信じてすまないなあ、おいらあ旅烏(たびがらす)もう二度と来ないからな」と言って闇の中に消えていきました。

その様子をじっと布団の中から見ていた五年生の姉賀恵子が「あの人達、昼間、お家を建てに来ていたお兄ちゃんたちだよ」ということで、まもなく、その強盗団もつかまりました。

母の沈着冷静な振舞で家族が何の怪我もなく新築の家も建ち私たちも今

新聞を読む智恵子

鎌ヶ谷で行われた法事の集まり

の家で成人することが出来たのです。

母との別れと法話の思い出

昭和二十三年やっと統制も解除され父と母は神田へ戻り店を再開しました。

私たち兄弟も半分ずつに別れ長兄、次兄、上の弟俊和が東京神田佐久間町に住み、賀恵子姉さん、私、末の弟廣行が鎌ヶ谷に残り学校に通いました。

月一回最勝寺のお寺さんを鎌ヶ谷にお呼びしてお説教を聞き親戚の人、家族とでおときをするのが何よりの楽しみでした。

母はよく働きました。お花をいけお仏壇のお磨き、お掃除、お料理と幾つもの仕事を同時にこなしてしまう、手品を使っているような、はやわざでした。母の立派な姿は私たち、子供、孫、また母にたずさわった方々の胸に脈々と受け継がれていることと思います。

月一回お寺さんをお呼びしての集まりは一度も休みなく続けられ父と母が神田からおみやげをいっぱい下げて来てくれるのが何よりの楽しみでした。

私が中学生の頃、母の座る横で昼寝をしていたら母は私の両足をひざにのせていつまでも、いつまでもさすってくれていました。こんなとき、うれしく甘えのひとときでした。子供にとって母に背中や足をさすってもちうことは何事にもかえがたいひとときです。私も小学校三年生から高校一年生までの七年間、母と離れて暮らしておりましたので月一回母に会える日のぬくもりを忘れることができません。

戦後再開した和泉屋商店の社員旅行にて

神田豊島町に事務所と裁断場と住まいが移るまで私は鎌ヶ谷で母との一日を待ち続けていました。

母の手料理

母の料理は絶品で、その手際の良さを教えてもらい、私たち女性群は十人、二十人のお客様が見えても料理を作れるよう培ってくれました。母に感謝の気持ちでいっぱいです。

また、リタイヤ後は勝浦のジャングルを父と開拓し、私たち子供は日曜日のたびに手伝いに行く楽しみと海の幸いっぱいの母のご馳走を頂くのがどれほどの楽しみだったことでしょう。お父さんもいつもうれしそうでしたよね。

また母の作る野菜の出来は農家の人より上手なくらいで、それをもらいに行く私たちはどんなに、うれしかったかわかりません。特にそら豆、えんどうは絶品でした。

母の健康

母が六十八歳の時体調をくずし入退院を繰り返す中、持病の腰痛で一年間起き上がれなかった時、父が七十五歳で永眠しました。

母もこのまま床についたままになるのではと心配しましたが本家の姉百合恵姉さんの献身的な看護に支えられすっかり良くなりました。姉に感謝です。

今では六十五歳で定年退職した兄俊一と「息子を遊ばせておいたら、ろくなことがない」と孫たちが通っていた鎌ヶ谷第四中学校を見下ろせる高台の土地を購入しました。

軽トラックを兄が運転し長靴に割烹着姿の母は助手席にちょこんと座って兵隊さんの敬礼のように右手を耳の所に挙げて私たちに挨拶しながら出かけて行きます。

「毎日畑に行くのが楽しみだよ。今日は行かないほうがいいんじゃないの。と止められると行きたくて行きたくて仕方がないんだよ」ですって。

母の喜び

この母の一番の望みは「お法り(おみのり)を聞いて喜びの身にさせていただくこと。ほかに何も望みはないよ」というのが口癖です。浄土真宗のお法りを喜び子供、孫、ひ孫をかわいがり、みんな、おばあちゃんが大好きと言われる母は最高の母親です。

ひとりの良い母親は百人の学校の先生にも勝る

と申します。

幼子に合わせてみせるこの両手

ありがとう。素直な良い子に母の笑み

この言葉はまさに母の歩んで来た道そのものです。私たちを大きな慈悲でつつんでくださり佛心という大きな心を植えつけてくださった母に心より感謝いたします。

母の心境

最後に母が三日前に作った短歌をご技露します。

平成11年3月28日早川智恵子米寿記念パーティにて

幸せは我が身に満ちて草引くも
しみじみうれし米寿となりぬ

称うれば（となうれば）弥陀のみ声と思わるる
もったいなさに南無阿弥陀仏

待ちわびて満開となりし桜草
嫁の手塩にいとしさつのる

お母さんありがとうございます。そして米寿のお祝いおめでとうございます。

英子

早川智恵子近影

表紙写真＆文：阿部英子　　レイアウト＆制作：早川廣行　　非売品

母、智恵子を偲ぶ

平成十七年三月七日に九十三歳の長寿を全うして、念願の浄土に旅立った母、智恵子を忍んで

阿部英子（次女）記す

母、智恵子の道程(みちのり)の続編です。この米寿祝いから六年後、寝込むこともなく旅立ちの当日まで元気だった母が、その夕辺には念願のお浄土に逝ってしまい、家族一同別れを言う隙も与えられなかったのですが、残された歌とともに在りし日を偲んでみました。

お父さまのめがね

1、お父さま　ねんね　めがねを　かけて
おねんね　ねんね　なにょして　ねんね
ゆめみて　ねんね

2、お父さま　めがね　ゆめみて　ねんね
ゆめみの　めがね　わたしが　みえる
わたしの　かおが

この歌は、母が大正七年四月尋常小学校へ入学して間もなく習った歌で、家へ帰って来て母親や姉弟に聞かせてあげたら、皆喜んで聞いてくれてすぐ覚えてくれたそうです。

私が母に手を引かれ、桜花満開の四月、鎌ヶ谷小学校の二分校へ入学した日、田舎の農道の細道を歩きながら、「お父さまねんね、めがねをかけて」と、何回も何回も歌ってもらって、学校の行き帰りに覚えた歌です。この時ばかりは、忙しい母を一人占めに出来た嬉しい日でした。

母の死後、在りし日の母の姿を思い出しているうちに、半世紀ぶりにこの歌を思い出し、私の口からほとばしり出てきました。懐かしさが込み上げてきまさに、母が口癖のように云っていた「南無阿弥陀仏のお六字は私の口を借りて出てくるお念仏を、私が喜ばせていただいているんだよ。」と云って、お念仏を喜んでおりましたように、私もこの歌が口をついて出て来た時、私の内には母がいるなあと思った途端、嬉しさが込み上げて参りました。

母の遺品の中に子孫に宛てた手紙と一緒に、九十一歳を過ぎる迄書き溜めた、お念仏を喜ぶ歌が沢山出て参りましたので、心に留め置きたいと思うものをまとめてみました。

母が喜寿を迎える頃、持病の腰痛が出て、寝たり起きたりの時期が続いて、少々弱気になっている時、昭和天皇が崩御なされ、そのニュースをテレビで見て、大層気落ちして、「私の人生も幕切れの時が近付いているな」と思うようになったようです。その頃の歌が番号をふった便箋に綴ってありました。

一億の　流す涙は　大君の
隠れ給いし　御胸の上に

大君の　逝きます朝　清らなる
雨降りしきる　静かなる一日

悲しみの　極みはこれに　勝るなし
　帝の柩　しずしずと行く

昭和消え　我が人生も　終われりと
　帝の御跡　慕うあまりに

柔軟な　心も我が身は　乏しゅうて
　慚愧歓喜は　なお薄かりき

なにもかも　時の流れに　流されて
　我が歳極め　梅花散り行く

石仏を　拝む人こそ　拝みたし
　萩散る秋は　深まりてゆく

もの悲し　秋深まれば　散りしきる
　あの紅の　残る一葉も

長き世を　妹に遇う日の　楽しさは
　不思議の中に　安らぎを得る

何時の日も　会えば楽しい　笑顔なり
　残り少なき　妹との逢うせ

七回忌　忘れかけたる　亡き夫に
　ひ孫を抱く　笑顔見たし

み光に　包まれし我　喜寿となり
　ひと日ひと日は　名残りつきまじ

母の九十歳から九十一歳迄の短歌は、母にとってただ有り難く、頭をひれ伏す思いで、生かされている心境を書き留めたものです。

生まれ来て　親の恩愛　今ここに
　我も伝えん　弥陀の大悲を

九十歳　心に響く　弥陀の声
　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

九十の　寿命ささえし　この身なり
　ただ有り難き　南無阿弥陀仏

今ははや　力尽きたる　我が身なり
　そのまま来いよと　親の喚ぶ声

生まれ来て　弥陀の光の　お念仏
　母より聞かされ　伝え聞き伝う

我が末を　支えし子等に　守られて
　今日の別れは　白道の途

死の風が　我が身の上を　通り行く
　念仏の声　親様の声

死を前に　我が身の幸せ　有り難し
　法を求めよ　子等よ同胞

死の風は　我が身の前を　通り行く
　二河の白道　我は行くなり

幸せは　仏の御恩の　尊さよ
　心静かに　南無阿弥陀仏

あとわずか　ひと日ひと日が　尊かり
　弥陀のお慈悲の　光の中で

あな尊と　佛のみ名に　抱かれて
　大安心の　我は往くなり

庭掃除　心の掃除　伴えば
　ただに嬉しく　南無阿弥陀仏

尊さの　極みに立ちて　我が命
　白道歩む　念仏の声

無気力の　身も尊かり　弥陀の慈悲
　ただ有り難き　南無阿弥陀仏

長き日を　御化導賜いし　二河の道
　やがて御親の　御手に抱かる

我が庭の　一隅照らす　梅の花
　命ある日の　今日の幸せ

人生も　尊き浄土の　橋渡し
　支えられたる　南無阿弥陀仏

九十の　齢重ねし　この身にも
　尊き恵みは　身に染みており

庭一面　散る花いとほし　ぼけの身に
　最後の花か　恋し散る花

御仏の　恵み頂き　我が一生
　迷い無き身の　尊き御恩

お念仏　心休まる宝物
　尊きこの世の　宝物なり

阿弥陀仏　呼び掛け賜う　み声なり
　我が称えつ　我が聞くなり

生まれ来る　命尊し　み佛の
　御縁に遇えよと　思いは馳せる

皆々も　尊き御恩　身に受けて
ひたすら歩まん　仏の道を

善知識　わが子となりて　日日を
手取り足取り　白道の道

（俊一さま、和好さま、有り難う、有り難う）

子　等　よ　皆　へ

この世の事は、自分に与えられた分を、正しく歩んで行くのです。
未来の事（後生の一大事）は、阿弥陀様に救われた身である事を聞いて、有り難い身にさせて頂き、母の後を歩んで、尊いお慈悲を喜ぶ身になって生き貰いて下さい。
人間に生まれた事は、阿弥陀様のお慈悲を聞く為だったのです。この世の物は全て置いて行くのです。ただただ尊い南無阿弥陀仏を頂く身になって下さい。死んで持って行かれるものは阿弥陀仏のお慈悲だけです。

我が一生　み佛様に　抱かれて
大安心の　懐の中

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

母の願い　智恵子

俊一夫妻はじめ皆々様

人生のお別れは辛いものです。身体に悪い所もなく、良き人生の終わりを迎える日も間近となりました。長い間の御好意を厚く御礼申し上げます。お互いに尊いお念仏を頂き、幸せ者にしてもらい安心の中で、死を待つばかりとなりました。有り難う　有り難う。やがて浄土の一員となる日も間近となりました。

ボケの身も　尊い念仏　有り難や

母より

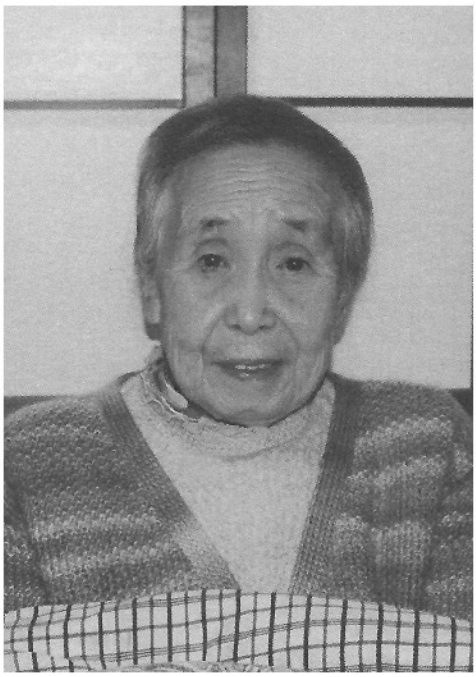
母の最後の言葉

皆様、私の一生はお念仏に支えられ、安心して終わらせて頂きます。

皆様にこよなく愛され病気もなく、最後迄お念仏と共に尊い一生を終わらせて頂きます。幸せそのものの人生でした。み佛様の尊い御加護を賜り感謝感謝の一生でした。家族の皆様に愛されて、何の不足もなく、ただただ幸せそのもの、ただただ御礼あるのみ、有り難う、有り難う。

お浄土での再会を楽しみにしています。

合掌　智恵子



平成十七年一月ミシン作業に疲れて炬燵で休憩（浄土に旅立つ2ヶ月前）

智恵子の　経　歴

長野県須坂出身の父　冨沢房治郎と福井県藤沢出身の母　篠崎よきが東京府小石川で所帯を持ち、男子四人女子四人の八人兄弟姉妹の上から二番目の次女として、明治四十五年二月十八日（１９１２年）に生まれました。

大正七年四月　東京府王子町第一尋常小学校入学
大正十三年三月同校卒業
大正十三年四月　東京府王子尋常高等小学校入学
大正十五年三月同校卒業
昭和二年四月二日　愛知県碧海郡明治村大字和泉出身の早川英俊二十歳と十五歳の時結婚、縫製業を営む。その後、東京神田大和町で作業服製造卸業を経営。先の大戦で昭和十九年三月　鎌ヶ谷へ疎開、戦後の食料難の時代、六人の子供を抱えて、慣れない百姓仕事をして、一家を支えて来た苦労は並み大抵の事ではありませんでした。

昭和二十六年統制経済の解除と共に東京へ戻り、繊維製品卸業を再開、和泉屋商店の女将さんとして、商売の第一戦に立ち、奮闘努力したその功績は、周囲の皆が一様に認めるところです。

五十歳で現役を引退、五十八歳で千葉県勝浦で、夫と共に隠居生活を十年間送っておりました。

私達子供や親族が週末毎に集まり、荒れ地を耕しながら海の幸をたらふく頂いて帰って来ました。

その後、母が病で倒れ、父が一人で勝浦で暮らしておりましたが、父は七十五歳の三月、脳梗塞でたった十六日間の入院生活で他界しました。

その時の母は、一年間寝たきりの状態で、父の葬儀にも出る事が出来ませんでした。

その後、奇跡的に快復し、母の静かな余生が始まりました。

九十三歳の春、三月迄は孫、子に囲まれ、六百坪の庭の草取りを一手に引き受け、人手を借りずに歩行が出来、味覚もしっかりしていて、おいしいねおいしいね、と云って三度の食事と、ミカンを喜んで食べておりました。

特に歯は丈夫で、「親知らずが未だ生えて来ないんだよ。」と云いながら二十八本の自分の歯で、良く噛んで食べておりました。

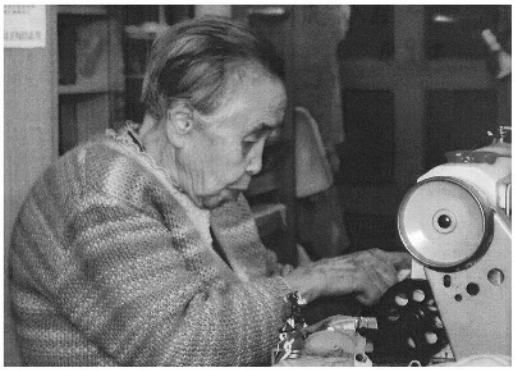
母は六人の子供達に、それぞれの伴侶が六人、二十四人の孫と、その伴侶が十九人、そして、ひ孫が二十人、総勢七十七人に膨らみ、まだまだ増える兆しの中、父亡き後、七十五人の親族に囲まれながら、九十三歳の長寿を完うして、平成十七年三月七日浄土に旅立ちました。

お母さん有り難うございました。お父さんお母さんの子供として、生まれ育て導いて下さった事を、心から感謝申し上げます。

幼い頃からお法の中に育てられ、忙しい中、毎月お寺さんをお招きし、親戚知人並びに私達にお説教を聞かせて頂き、おいしいお料理を沢山作って下さり、大勢の方々とのお話し合いの機会を作って下さった事は、私共親族にとって得難い財産になりました。

これからは、なお一層一日一日を大切に、母の教えを噛み締めながら、お法の中に生かされて行く人生を、暮らしていきたいと思います。

合掌　英子



ミシンの前で作業に集中（九十三歳）

直系四代
右から智恵子
見香子（孫）＋
ミア（曽孫）
左が英子（次女）

19番目の曽孫
美月を抱っこ
92歳